NPO法人
横浜シュタイナー学園
シュタイナー教育を実践する小中一貫校

Newsletter

第 160 号
2023 年 7 月 28 日発行

7 月号は、p.1『学園祭 2023』、p.4『そろた出そろた、早苗がそろた』、p.5『保護者向け「性教育ワークショップ」』、p.6『全校でヨハネ祭を祝いました』、p.7『学期祭』のトピックでお届けします。

「学園祭 2023」

9 年生担任　神田　昌実

6 月 9・10 日に霧が丘のオープンデイと並行して、十日市場校舎では 7 ～ 9 年生が開催する学園祭が行われた。

9 年生は 8 年生劇を終えるとその余韻に浸ることもなく、3 学期は学園祭を目標にして進んでいたように思う。「まだ早いよぉ～」と言う担任はあきれられ、「またぁ！のんびりしてるんだから！すぐですよ、学園祭は！」と尻を叩かれた。実行委員長と副委員長はあっという間に決まり、いろいろな計画が進みだした。「やれやれ、はい、ついて行きます。」という感じのスタートだった。

しかし、彼らには、「何でもやっていいけど、私経由で教員会に常に報告・連絡・相談、通称『ホウレンソウ』を怠らないこと。」を強く伝えた。「私が知らないのにどんどん進めていたら『こんなのはダメだぁー！』ってちゃぶ台引っくり返すからね。」と脅しも入れておいた。その成果か、9 年生の実行委員長はもちろん、どの担当者も私に経過を報告したり相談してくれたりして、常にどう進んでいるのかが把握できていたので安心して任せることができた。

新年度が始まって 2 週間後の 4 月 21 日（金）、今年度の学園祭はどのように行うかの説明が実行委員長の F.I. から 7 ～ 9 年生に話された。7 年生はちょっと緊張した表情であったが同時にとても楽しみな様子でもあった。

その後しばらく 7 年生のための部活動体験期間があり、5 月 15 日（月）からいよいよ学園祭準備が始まった。倉庫の中から学園祭関係の段ボール箱が運び込まれ、リーダーは各チーム（ワークショップ・縁日・段ボール迷路 “Adventure of The 段 wall”）の今年作る景品やその数を考えた。放課後

の 7 ～ 9 年生教室は各チームの作業場になり、それぞれ熱気に満ちた時間を過ごしていた。5 時になると 7 年生は下校、8・9 年生は 6 時まで作業ができる。

その合間に有志による劇・個人発表・合奏などの練習も朝や放課後に行われていた。それらの連絡は下駄箱上の壁に掲示されたり、ホワイトボードに書かれたりして伝えられた。来年加わる 6 年生もそれを見ながら 7 年生になるのを心待ちにしているようだ。教員は事務所で仕事をしながらコピーなどを頼みに来る生徒に対応する。

こうして忙しくも楽しい 1 か月があっという間に過ぎたが、本番 1 週間前になると 9 年生のリーダーたちは疲れもピークに達する。まずは合奏のリーダーが微熱で欠席。次に実行委員長が喉の痛みと微熱を訴え 1 日欠席。ワークショップのリーダーもヘロヘロクタクタで発熱し 1 日欠席。縁日のリーダーは朝から溶けそうにどよーんとして机に突っ伏していた。段ボールチームのリーダーは毎日家でも景品を作り、寝不足な様子。きっと誰もが「責任」という重さを両肩にどっしりと感じていたのだろう。

6 月 7 日（水）第 5 専科をなくして一斉に机運びが始まった。私は知らなかったが、6 ～ 8 年生の担任には実行委員長から詳細な何をどこに幾つ移動させるかのメモが渡されていたらしい。手際よく机や棚の移動が進み、生徒たちの控室になる 9 年生教室の端には廊下に置いてある全てのミシンが運び込まれた。「ミシンは重いから 9 年男子が運べ！」という 9 年生男子の頼もしいこと！教室は狭くなったが皆が交代で休んだり食事をしたりする場所はきれいに整えられていた。事前

の計画をよく立てたのだろうなと感心した。

6月8日(木)会場作り。9年生の今年の計画は、「今までやったことのない形にしたい！」だった。ワークショップは机をランダムに並べた。黒板の絵は7・8年生が虹が出ている花咲く野原を描いた。ワークで作る作品は年齢によって多種選んで用意していた。縁日は本当の縁日の気分を出そうとしていた。おみくじの屋台が斬新だった。輪投げも劇用の枠を使って高い位置に作っていた。黒板には祭り櫓の周りで踊る子どもたちや縁日の屋台の風景が描かれていた。スタッフは張り子のキツネのお面を斜めに被っていた。これも手作りだ。段ボールチームは壁を作るための段ボールのつなげ方をどのようにしたら良いかをオイリュトミー室で講習するところから始まった。「こうやってつなげていたのか！」と感心した。これは先輩たちから引き継がれてきたものだ。この日は段ボールチームだけがあと少しのところで設営が完成しないまま時間切れとなった。「明日、開場までには3時間あるからそこで仕上げよう！」「みんな、よく寝てね。」という実行委員長の言葉と共に生徒たちはワイワイと下校した。

翌日は雨予報、しかも大雨。警報が出た時の対処を教員たちは考え連絡網を回した。9時過ぎには雨が止みそうなので、警報が出ても1時間遅れで実施しようということになった。

6月9日（金）学園祭1日目は学内向け。雨降りだが警報は出ず。私は7時に校舎を開ける予定だったが早めに登校した。金曜日は紙やペットボトルのリサイクルを出す日なので、たまっていた段ボールゴミを10袋ほど玄関に並べ、早く来た生徒たちに収集所に出してきてもらった。生徒たちが動きやすいように目立たぬ部分でサポートするのが学園祭での教員の重要な仕事だ。

皆が登校し、段ボールチームは最後の仕上げに取りかかった。縁日チームは水ヨーヨーを作る作業を玄関で始めた。ワークショップチームは前日に地区センターで作った焼き菓子を並べた。書道部の一点物Tシャツも壁を飾っていた。

8時半、オイリュトミー室に全員が集まり、朝の会をした。実行委員長の合図で「朝の言葉」を唱え、連絡事項が伝えられた。全員が1重の輪になり肩を組んで「学園祭！頑張るぞ！」「オー！！」という掛け声とともに各自それぞれの持ち場に散らばった。

10時過ぎ、1・3・5年生が担任に連れられてやってきた。どの子もワクワクしていることがよくわかる。保護者や祖父母たちもやって来て入口は大混雑になった。生徒たちは接客に追われ、会場内は熱気に満ち溢れていた。しかし、みんな下級生に優しい！下級生は両手いっぱいの作った物や景品を抱え、自分の鞄にしまいに行く。満面の笑みだ。

11時半、オイリュトミー室での1回目の発表の時間だ。実行委員長が挨拶し、劇「かぐや姫」のリーダーが「ちょっと皆さんが知っている『かぐや姫』とは違うかもしれませんが、お楽しみください。」と言って、劇が始まった。かぐや姫は白いロングドレス姿、おじいさんはオーバーオールに長いベスト、おばあさんはワンピースにショール、という洋装である。しかし物語はほぼ原作と同じで、最後は月からのお迎えに連れられてかぐや姫は月の国に帰ってしまう。今年の役者は7・8年生のみだった。7年生は初めての劇出演だったが頑張っていた。8年生はこれから行う8年生劇の準備になったのではないだろうか。次の個人発表では7年生二人の見事なジャグリングと観客を笑わせる小気味いいユーモア！お手玉の動きが分からないくらい速く、美しいジャグリングに皆が唸った。次は9年生女子によるお話の語り聞かせだった。この生徒が個人発表をやると聞いて私は、「えっ！！○○が個人発表をするの？何やるの？」「秘密です」「え～～～？！ 出て来て、もじもじして引っ込むのだけはやめてね」「そんなことしませんよ！」などと失礼なことを言っていた。子どもの頃に好きだったお話をお客さんにも聴いてもらいたいという彼女の語りは立派だった。膝の上に本は置いていたが、丸暗記していた。ごめん、本当にごめん！前言を撤回させてください。最後は有志による合奏だった。バイオリン、チェロ、クラリネット、フルート、リコーダー、タンバリン、チャイム、ピアノという8種類の楽器がAチーム・Bチームに分かれて第1回目と第2回目の発表をそれぞれ担当していた。曲は「くるみ割り人形」と30年前の映画ニュー・シネマ・パラダイスから「愛のテーマ」。私のように「愛のテーマ」から映画の一場面一場面が次々と目の前に現れた方も多かったのではないだろうか。最後は実行委員長のお礼の言葉で締めくくられ、皆は満足そうに帰って行った。午後の部も同じように大忙しで行われた。

学園祭1日目は15時には下校できる予定だったが、明日

もこの調子だったら景品が足りないと考え、景品の作り足しのために９年生だけが 16 時半まで残って作業した。

６月 10 日（土）学園祭２日目は外部の方々向けの日だ。横浜シュタイナー学園で１年生から学んできた子どもたちはどのようなティーンエイジャーに育つのかをお客さんは見に来る。この日は予約制で午前午後とも大人子どもを合わせてそれぞれ 80 人ほどの方が申し込んでくれていた。前日と打って変わって混雑は全くなく、静かに穏やかに学園祭は進み、みんな拍子抜けしたかもしれない。しかし、小さい子に優しく接して応対してくれるお兄さん、お姉さんたちにお客さんは好感を持ってくれた。アンケートにもそのことが多数書かれていた。

発表の時間の最後に、寄付のお願いをするために私が挨拶をした。私の中には横浜シュタイナー学園で育った思春期の子たちへの大きな信頼がある。だからつい自慢したくなる。挨拶の中にも「自慢の子たちです！」や「いい子たちでしょう！」の言葉が出てしまった。お客さんたちが同意してくれたようで安心した。

一般のお客さんたちが帰った後は、恒例の卒業生や転校した生徒たちのための学園祭が待っている。彼らは 15 時ごろからやって来て各アトラクションを楽しんだ。今年は彼らのための発表の時間も取ってあったので、皆ゆったりとオイリュトミー室の床に座って発表を観ることができた。合奏は A・B 両チームが一緒になっての重厚な演奏だった。

そしてその後は、これも恒例になっている卒業生がピアノで伴奏し、卒業生在校生がかつて、そして今も合同音楽の時に歌っている歌が数曲合唱されるのだが、今年は昨年の実行委員長から今年の実行委員長の労をねぎらったサプライズ合奏で「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」と「星に願いを」がその前に披露された。と言っても二人とも音楽部員だったので一緒に演奏したのだが。

その後恒例の全員での合唱が行われた。何度聴いても心が温かくなる合唱だ。この学校で育って良かったという生徒たちの思いが伝わってくる。ピアノ伴奏を毎年してくれている５期生のピアノの音色が円熟味を増したように感じた。彼も二十歳になった。

それからこれも恒例の先輩たちも手伝ってくれての片づけが始まった。各教室の解体と段ボールをまとめて縛る仕事や移動した荷物を戻す作業だ。皆、何をすればよいかを分かっているので片付けはとても速い！縛った段ボールの束は強力な黒子である９年生保護者が玄関で待ち受け、あれよあれよという間に車に積み込み自宅へ持ち帰ってくれた。深く感謝したい。

各教室が来週からすぐに授業が始められる状態に復旧し終わると全員がオイリュトミー室に再び集まった。締めである。実行委員長から皆へのお礼の挨拶が済むと、私がしゃしゃり出る。

「7 ～ 9 年生の皆さん、準備、そして昨日今日の学園祭本番、お疲れさまでした。今年もとても良い学園祭ができました。先輩たちも来てくださり、片付けも手伝って下さり本当にありがとうございました。皆さんの今後の幸せを願って三本締めで締めくくろうと思います。（ちょっと間をおき、声色を歌舞伎調にして）それでは皆様お手を拝借、ようーお、×××　×××　××××、ハッ！×××　×××　××××、もう一丁！×××　×××　××××。お疲れさまでした！（拍手～）」こうやって今年も学園祭は満足そうな生徒たちの顔と共に終了した。みんな、お疲れ様！

「かぐや姫」は最後の台詞で月からの使者に向かってこう言った。「待ってください。そのヴェールを被ると人の心が分からなくなってしまいます。その前におじいさんとおばあさんにお礼を言わせてください。」人間は動物のように、教えられなくても生きるための術が分かっている生き物ではない。だから学校で学ぶ。人の心が分かるようになるために学校で学ぶのだ。学園祭は人の心を学ぶ最高の機会だと毎年思う。

そろた出そろた、早苗がそろた

３年生担任　島田　頼子

３年生では、大きなエポックとして「くらしとしごと」という学びがあります。そろそろ目覚めの時期。９歳に向けて地に足を付けつつあるこのときに、必要な学びです。この「くらしとしごと」の中の活動として、先日、田植えを体験しました。

前日に、田植えのやり方の流れを、教室で予行演習しました。田んぼに入るときは、裸足になり古い長靴下を２枚重ねてはきます。泥の中を歩くことが難しいからです。足がすっかりはまってしまうので、歩くというよりは一足一足抜き取る感じです。片足のかかとを上げ（ズボッ）外側に向け（グイッ）足を抜く（スポン）。それからもう一本の足。ズボッ、グイッ、スポンを掛け声とともに繰り返します。教室はあっという間に田んぼの中のようになりました。

子どもたちは手に手に苗のかたまりを持ちます。利き手で３～５本の苗をはがし、根の近くを持ち、泥の中の土部分にしっかりさします。田んぼの中では一列に並び、目の前に横に伸ばされた紐の印近くに苗を植えると、きれいな列になって苗がそろいます。一列の子どもたちは、一つ植えると、後ろに下がります。『ズボッ、グイッ、スポン、ズボッ、グイッ、スポン。』利き手で苗を３～５本はがし、紐の印の向こうに植える。田んぼに出かける前から、教室にたくさんの苗を植え、子どもたちの胸の中にやる気が満々に満ちました。

６月７日水曜日。怪しかったお天気も、朝は気持ちよく晴れました。ピクニック気分で新治の森へ出かけました。森の中はしんと静かで、鳥のさえずりが迎えてくれます。直ぐ近くからも、澄んだ歌声が聞こえてきました。歌声や木漏れ日を楽しみながら歩きます。

田んぼに着くと、シートを敷いて身支度をしました。靴を脱ぎ、長靴下を二重にはき、ズボンをまくり上げ、首にタオルを巻き、一気にお百姓に早変わりです。田んぼを囲んで立ち、「田植え歌」を歌い、田んぼの神様に挨拶をしました。

そろた出そろた　早苗がそろた
植えよ植えましょ　みんなのために
米は宝だ　宝の草を
植えりゃ黄金の　花が咲く

いよいよ田んぼに入ります。子どもたちは恐る恐る泥の中に足を突っ込みました。今こそ、練習の成果を発揮するときです。

『ズボッ、グイッ、スポン。』練習通り歩きます。

「思ったよりずっと歩きやすい。」「本当だ。」

あちこちから声が上がります。三品先生と一緒に、代々受け継いできている赤い印が並んだ紐を、長く伸ばしました。苗床の苗をちぎって一人ずつ渡し、残った苗を田んぼの中に投げます。

「はい、どうぞ。」赤い印の向こうに、３～５本に取り分けた苗を泥の中に埋めます。みんなが植え終わると、「後ろに下がって。」と声をかけ

『ズボッ、グイッ、スポン。』

わあわあにぎやかな声の中、子どもたちは後ろに下がります。

「はいどうぞ。」苗を植え、『ズボッ、グイッ、スポン。』後ろに下がり、また「はいどうぞ。」と、繰り返しです。

「メダカがいるよ。」「ヒルがいるよ。」

「クモが水の上を這っている。」「穴が深くて植えられない。」

「わあ。」と言う声とともに、お尻が泥につかってしまった人。

小さな事件がたくさんあり、けれども無事に田植えが終わりました。泥まみれの手足で何とかあぜ道に這い上がり、そばの小川で泥をきれいに落とします。ぴったり張り付いた二重の長靴下を脱ぐのが大変そうでしたが、助け合いながら靴に履き替え、必要な人は洋服を着替えたりしました。

最後にもう一度田んぼを囲み、田んぼの神様に挨拶をしました。泥に深く入りすぎている苗、少し倒れている苗、印通りに植えたはずなのになぜか曲がっている列、様々ありましたが、さわやかな風に揺れる苗の姿にみんな満足し、田んぼを後にした子どもたちです。

その後、池ぶち広場でお弁当を食べ、駆け回ってたっぷり遊び、学校へ戻りました。予定よりも早く学校に着いたので、教室で勉強してから下校となりましたが、ほとんどの子どもたちがペレ (学童保育「ペレの家」) に行きました。ペレの先生に「田植えと聞いていたから、大興奮でやってくると思っていたけど、いつも通りの様子で驚きました。」

と言われました。体力のある子どもたちです。

この後も、草取り、稲の花の観察、そして秋が深まってからの稲刈り、脱穀、もみすり…と、田んぼの学びは続きます。大地にしっかりと降りてくる、９歳に近づく子どもたちに、今まさにぴったりで大切な学びです。

保護者向け「性教育ワークショップ」

勉強会グループ

2023 年 6 月 18 日（日）に十日市場校舎にて保護者向けの性教育ワークショップが学内講座として開催されました。5 年ぶりとなるこの講座の講師は、東海大学国際学部教授の小貫大輔さんです。「ジェンダーとセクシュアリティ」、「人間学」などの授業を教えておられます。講座は午前と午後の二部に分け、午前が幼少期から 10 歳頃まで、午後は 10 歳頃から思春期までの性教育のワークショップを行いました。

前回の講義で特に印象的だったのは、小貫さんが男性器の包皮の研究を開始された時期で、その仮説に対してお父さんたちが研究対象としてアンケートに答えた記憶があります。今回は数々の統計上の根拠から、その仮説が確信に変わった内容にアップデートされていました。その他も日本の社会で触れない話題に対して目から鱗の内容をたくさん学ぶことができました。お昼休みは少し長めの 2 時間をとり、保護者同士が近所のレストランでランチしながら、または校舎内ベンチコーナーでお弁当を食べながらワークショップの続きを語らいました。

世界各地のシュタイナー学校では、シュタイナー教育にふさわしい性教育の姿について模索が続いています。国によっては、性のことは家庭が教えるのが一番という考えがあったり、家庭の役割と学校の役割を区別する考えがあったりしますが、保護者同士でこの様な話題を出しづらい中で、今回の講座は保護者が親として子に向き合う準備や、学園内で会話を始める良いきっかけになったと感じています。そんな保護者の一例として、以下の感想文を皆さんにご紹介します。

4 年生保護者　マーティン　ジャック

子どもたちへの性教育について、私は非常に興味がありました。私は 13 歳まで日本に住んでいて、その後に家族でオーストラリアに移住したのですが、両親や学校から性に関する情報がほとんど無かったからです。今回のセミナーでは午前と午後のセッション、両方とも参加させて頂きましたが、小貫大輔さんのお話がとても素敵でした！人間の親密な関係、スキンシップ、セクシュアリティ、子づくりなど数多くのトピックに対処するための情報を聞かせて頂きとても勉強になりました。子どもたちとセックスに関する話をする際に、私たちが一般的に使う性器を表す言語、そして「赤ちゃんは、どうやって生まれるの？」「赤ちゃんは、どこから来るの？」など、素朴であると同時にとても複雑な会話を子どもたちとする方法についてもお話し頂きました。子どもと話す時に適

切な言葉やメッセージを選択することでこの難しさを克服し、子どもたちとオープンな会話ができるよう、私たち親が準備するためにとても役に立つ情報です。

セミナーでは他の保護者とのオープンディスカッションが数多く行われましたが、普段保護者同士でお話する話題ではないので、皆さんの考えや意見をとても興味深く聞かせて頂きました。会場で展示されていた身体的な親密さと性愛のストーリーを描いた絵本も、私にとっては非常に新しいものでした。この複雑な課題を視覚的な補助と共感しやすいキャラクターを使い、とてもうまく伝えているので、我が家でも今度これらの本を使いたいと思っています。

私は若い頃セックスに関する疑問の答えを、男性誌などから集めましたが、その多くはひどい誤解を招く情報が沢山あったことを覚えています。今ではインターネットから莫大な情報にアクセスできるようになり、子どもたちがそのような情報にさらされる前に、正しいメッセージを伝える必要があると思います。今回のセミナーを受講して、私の両親がこのような情報を思春期の私に話していてくれたら、自分の人生は変わっていたであろうか？と考えさせられました。

とても大切なセミナーを企画して頂き大変ありがとうございました。そして今回は多くの参加者がありましたが、都合がつかなかった保護者さんにも是非この貴重なお話を聞いて頂きたいと思いますので、また将来このような企画をして頂けたら素晴らしいと思います。

全校でヨハネ祭を祝いました

教員会祝祭担当　三品　恭子

夏至の二日後の６月23日（金）、太陽は曇の陰に隠れてはいましたが、今年度も全校で河原に集い、ヨハネ祭を祝うことができました。「当日は何とか降らないでほしいですね」「来週の金曜は雨マークがついていますね・・・」「天気予報が曇りになりましたね！」「金曜は降らないみたいですよ」等々、例年６月半ばになると、教職員間でも、出会う保護者さんからも、かけられる言葉は当日のお天気のことが多くなります。太陽の動きをもとにした暦である二十四節気では、夏至は６月21日～７月６日頃と言われています。一年で最も日が長くなり、気温が上昇し、日に日に暑さが増していく一方で、日照時間は少しずつ確実に短くなっていくのを感じる季節です。ですので、私たちは太陽が力強く輝き続けるよう願いを込めて焚き火をたき、その周りで歌い、踊り、自然の美しい輝きを謳歌するのです。とは言え、横浜は梅雨真只中ですから、毎年このような会話が交わされ続けているのですが、皆さんの言葉や空を見上げる表情から、今年も多くの人がヨハネ祭を楽しみにしていることが伝わってきました。

ヨハネ祭の１週間程前から、教室でヨハネ祭の歌を歌う子どもたちの声が聞こえ、複数学年で一緒にダンスの練習をする姿も見られました。また、霧が丘校舎の玄関には、大小の枝や木材が積まれた木箱が置かれました。この枝や木材は、当日焚き火に使う薪になるのですが、この準備は毎年５年生の子どもたちと一緒に行っています。薪割り初日、いつもよりも早く登校し、「今日は薪割りだよね？」と嬉しそうに話しては教室に向かい、急いで玄関に戻って来る５年生。きっと、昨年の５年生が薪割りをするところを見ながら、来年は自分たちがするのだ、と楽しみに待っていたのだと思います。５年生の保護者の方々も多く参加してくださり、丁寧に仕事を進める子どもたちを見守ってくださいました。初めはちょっと怖いと言っていた女の子が「意外と楽しい」と口にし、男の子たちは慣れてくると、「ここに節があるから無理だね」「刃を入れる向きを変えたらこれは割れそうだよ」など自分で枝を選び、少し厚い板を割る事にも挑戦しました。この光景を初めて見た１年生は、立ち止まっては不思議そうにその姿を眺めています。昨年、同じような表情を見せていた２年生、３年生、４年生は「ヨハネ祭だ」と笑顔で通り過ぎて行きました。目を丸くして眺めていた１年生たちも、来年はそんな笑顔を見せてくれることと思います。子どもたちは、毎年同じ様に、繰り返し現れる自然の姿に安心し、再びその季節が廻ってきたことに喜びを感じています。また、目に見えない力による自然の変化を感じることで、それに対する畏敬の念も育っていくのです。ですから私たち大人は、「今年もこの季節が来た」と子どもたちが安心と喜びを感じられるよう、祝祭の準備も毎年同じ様に行っていきたいと思っています。

ヨハネ祭当日は曇りでしたが、河原で太陽の方向に手をかざしてみるとやはり温かく、雲の向こうで輝く太陽を感じることができました。子どもたちが到着し、焚き火を囲んで環になると、いよいよヨハネ祭の始まりです。過去最高の児童･生徒数になった今年度の輪の大きいこと！皆で歌を歌い、ヴァイオリンの伴奏で楽しく踊る中、上級生とペアになることが嬉しくて仕方のない下級生の笑顔が印象的でした。また、太陽に見立てた大きな輪に、赤、オレンジ、黄色のお手玉のような太陽の子を投げ入れる「太陽の子投げ」では、輪を支える８年生が、一人ひとりが投げた太陽の子が輪を通るように、色々と工夫をしてくれましたので、１年生でも輪の中に投げ入れることができ、とても嬉しそうでした。また８,９年生が投げる姿は、その力強さに周りで見ていた低学年の子どもたちと保護者から、何度も大きな拍手がおきていました。昼食には、太陽の恵みを受けて育った夏野菜を皆でいただき、いよいよ焚き火跳びの時間になりました。８年生から１年生までが順番に一人ずつ焚き火を跳び越えていき、最後に９年生が跳び終えると、もう一度輪になり、小さくなっていく焚き火を見ながら歌を歌い、今年のヨハネ祭も静かに閉じていきました。準備から始まり、祝祭の余韻を味わう大人とは異なり、翌週には既に子どもたちの気持ちは楽しい夏休みに向いているようでした。

1 学期　学期祭

7 月 15 日（土）瀬谷公会堂

横浜シュタイナー学園では、一学期ごとに広い会場を借りて各学年の日ごろの学びを披露する会を行っており、1、2 学期末に行うものを「学期祭」と呼んでいます。低学年から順々に身体が大きくなっていき、発表内容も学年相応に変化していく様子を教員、保護者、子ども同士が見合うことで、学園全体の気持ちが一つになる大切な行事です。

1 年生　エポック授業より
リズム

2 年生　中国語より

3 年生　音楽の授業より
おひさまよ　てらしておくれ（Lieber Sonnenschein ）
パンドゥールの歌（Pandur Pandur Andandori）
あまいりんご

4 年生　オイリュトミー
ヘンデル「ガヴォット」
ハイドン「アンダンティーノ」
R. シュタイナー「大地の夜の中　植物は芽生える」
フリーデマンバッハ「春」

5 年生　笛の演奏　Welsh Canon
リズムの時間より

6 年生　オイリュトミー
ベートーヴェン「エコセーズ」
オクターヴエチュード

7 年生　リコーダーアンサンブル
シューベルト / ます（Die Forelle）
英語の歌：For Health and Strength,
Laughing Comes the Summer

8 年生　オイリュトミー
谷川俊太郎「生きる」
ショパン「幻想即興曲」

9 年生　《鎮魂の音楽として》
歌 / ヨハネ讃歌
管弦楽合奏
ローター・ロイプケ / オルフェウスの原初の言葉
（Urworte Orphish）

横浜シュタイナー学園　～ Newsletter 第 160 号～
2023 年 7 月 28 日発行

編集：広報の会
発行：NPO 法人横浜シュタイナー学園
https://yokohama-steiner.jp
〒 226-0016 横浜市緑区霧が丘 3 丁目 1-20
TEL　045-922-3107
※ 掲載内容の無断転載をお断りします